

## 博士学位論文要旨

申請者：岡田 悠汰

題目：隠れ—なさと有限性——ハイデガーにおける「真性」と「われわれ」の問題

### 要約

本研究は、ハイデガーの『存在と時間』（1927年）から『哲学への寄与論稿』（1936–38年）にかけての思索を、「真性 Wahrheit」と「われわれ Wir」という観点から解釈するものである。本研究の題目たる「隠れ—なさ」と「有限性」は、それぞれ「真性」と「われわれ」に対応する鍵語である。本研究のみるところでは、1927年から1938年にかけてのハイデガーの思索は、隠れ（覆蔽性）と隠れなさ（不覆蔽性）の間の絶えざる闘争的關係である「真性」と、そこに関わるわれわれの「有限性」という二つの主題の探求の深まりとして理解される。

第1章では、『存在と時間』公刊部の真性の探求を概観しつつ、その到達点を最も根源的で本来的な「先駆的覚悟性」として見定める。しかし本研究の見解では、ハイデガーが現存在における真性と非真性の等根源性を主張しつつ、その等根源性を先駆的覚悟性という「最も根源的な」真性から説明することの問題点を指摘する。つまり、最も根源的で本来的な真性である先駆的覚悟性は、現存在が自身に突きつけられている有限性を積極的に引き受けるあり方として、有限性を有限性として露わにするのだが、なぜ現存在が有限であるのかを説明しないのである。

第2章では、『存在と時間』公刊後のハイデガーの思索の展開を追跡するために、『存在と時間』公刊部の成果である時間性の議論を概観したうえで、『存在と時間』直後に展開される「メタ存在論」の構想の位置づけを明らかにする。『存在と時間』では、現存在の存在の意味として、「将来」、「既在性」、「現在」の三つの脱自態の統一である時間性が語られる。このさいに問題となるのは、「現在」が他の二つの脱自態と異なる位相をもっているということである。すなわち、「将来」と「既在性」が「自己の存在」に関わるのにたいし、「現在」は「他の存在者」に関わる脱自態なのである。「現在」のこの特異な位相は、本来性と非本来性の区別以前にあるはずの「現在」が非本来性と親和的であるということにつながっている。それゆえ、『存在と時間』においては本来的な「現在」である「瞬間」の規定が不十分

であり、存在者との本来的な関わりについての議論は展開されていない。このように「現在」という脱自態がもつこの特異な位置づけが、『存在と時間』公刊部における時間性の議論が孕む問題として露わになる。

本研究の見解では、『存在と時間』以後に展開される「メタ存在論」の構想は、未完に終わってしまった『存在と時間』のプロジェクトの内部にある。この構想のなかでハイデガーは、現存在の実存ないし存在了解を可能にする「全体における存在者」を主題化する。これを踏まえて本研究は、現存在の企投ないし存在了解に焦点が当たっていた『存在と時間』公刊部の基礎存在論の議論から、現存在の被投性ないし事実性に焦点が当たるメタ存在論への議論という変遷を明らかにする。この変遷を経たうえで1929年のハイデガーの思索において、現存在の被投的企投の等根源性に由来した基礎存在論(企投)とメタ存在論(被投性)の両輪からなる「現存在の形而上学」が成立する。基礎存在論からメタ存在論への転換は、存在論的差異の探求の進展ともいえる基礎存在論の徹底化によるのであり、本研究の解釈によれば、この転換は『存在と時間』の「存在の意味への問い」から『存在と時間』以後の「存在の真性への問い」への展開を予告しているということになる。

第3章では、ハイデガーの真性の探求に関しての重要著作の一つであり、近年そのもととなった講演諸原稿が刊行された、1930年の『真性の本質について』をハイデガーの思索の展開の大きな転換点として位置づける。このさいに着目するのが、メタ存在論の構想と共に『存在と時間』公刊後の思索の展開にとって重要な「超越」の議論である。本研究は、1929年の「超越」の議論を現存在が世界内存在として生起する場面を扱っているものと解釈したうえで、『真性の本質について』で主張される真性の本質としての自由が、超越の議論の成果を前提としたものであり、超越の議論から出てきた「深淵〔脱根拠〕」や「無」が「密令」、そして「存在の真性」へと結実することを明らかにする。そしてこの展開は、ハイデガーの超越論的思索から存在史的思索への転換が告げるものとして理解される。

第4章では、『存在と時間』公刊後のハイデガーの思索の変遷を彼の「洞窟の比喩」解釈の変遷から読み解く。このさいに注目するのが、ハイデガーが『存在と時間』期には「洞窟の比喩」に仮託して、「存在の意味」への問いを理解していたのにたいし、1931/32年の講義『真性の本質について』では「洞窟の比喩」をアレーティアの経験を喪失しアイデアが前面に出て来る場面として論じていたことである。つまり『存在と時間』期では、プラトンのアイデア論を捉え返して「存在の意味」への問いを構築していたのにたいし、1931/32年の講義では、アイデア論によってアレーティアがアイデアの軛のもとにあるとしてアイデア論を批判的に

論じるようになる。本研究は、第2章で論じたメタ存在論への転換による全体における存在者の主題化ゆえに、「存在の意味」への問いが「存在の真性」への問いに、あるいは「実存の真性」の探求が「存在の真性」の探求に進展したと解釈する。ここに至ってはじめて、真性は不覆蔵性と覆蔵性の絶え間ない闘争として捉えられるのである。

第5章では、1935/36年の『芸術作品の根源』を主題として、なぜ芸術作品において真性が生起するのかを論じる。このさいに着目するのは、ハイデガーのアイデア批判と質料-形相論批判である。1930年代以降のハイデガーは、アイデア批判を先鋭化させていくが、アイデアが支配的になる背景にある種の必然性を見て取っている。1935年の『形而上学入門』では、存在そのものであるピュシスが現前してくるという動向が、アイデアを本質的に帰結させるといっている。ハイデガーにとって問題なのは、ピュシスからアイデアが帰結してくるということよりも、ピュシスの帰結に過ぎないアイデアがピュシスに代わって本質そのものとして捉えられるということである。ピュシスの動向が保持されたまま露わになる場として要請されるのが、立ち現れる世界と覆い隠す大地の相互依存的に対立する動向をもつ「芸術作品」である。このとき芸術作品は、道具と同じように製作されたものであるが、しかし道具とは異なり質料-形相の対概念で理解されるものではない。ハイデガーは、アリストテレスのデュナミス-エネルゲイア解釈を通じて質料-形相論を換骨奪胎し、われわれが「現働性」と名づけた特殊な現実性を芸術作品に見て取ったのである。その現働性は、質料が素材として消費され形相を獲得して現実化するのとは異なった、「世界と大地の闘争」という絶えず緊張を孕んだ動性である。

第6章では、芸術作品と「民族」の関係に焦点を当てた。ハイデガーによれば、ピュシスの動向が露わになるのは、あくまでわれわれがピュシスと協働すること（テクネー）によってである。ハイデガーは、芸術作品にたいするわれわれの関わり方を「詩作」と「見守り」として論じているが、そのさいのわれわれのあり方を「民族」と名指している。この理路を詳らかにするために、本研究は『存在と時間』以来の時間性の議論と1934年の『言葉の本質への問いとしての論理学』における三重の「使命」の議論との連関を手掛かりにする。この議論から明らかになるのは、「詩作」と「見守り」の議論が『存在と時間』における脱自態としての時間性の議論を変奏的に展開したものであるということである。

第7章では、1936年から38年にかけて書かれた覚書『哲学への寄与論稿』をもとに、この時期から展開される「性起」の思索における「存在の真性」の探求を考察する。ここでは、「存在の真性」への問いが本格的に問いとして立てられ、「存在の真性」の方からわれわれ

のあり方が、性起としての存在から必要とされる存在者、存在を基づけ護る「将来的な者たち」として捉えなおされる。ハイデガーは、性起の思索によって、西洋形而上学とは「別の始原」への移行を試みる。しかし本研究のみるところ、この移行は断絶ではなく、あくまで形而上学の歴史を遡行するなかで生じるものである。またこれと同時に、ハイデガー自身による『存在と時間』の捉えなおしが行われる。本研究の見解では、『哲学への寄与論稿』における「性起」の思索は、『存在と時間』以降の超越論的な思索の果てに見出された覆蔵性と不覆蔵性の闘争としての「存在の真性」を契機として、「存在の真性」の方からアイデアに始まる西洋形而上学の捉えなおしを通じて到達した境地なのである。したがって、1936年に主題化される「性起」の思索は、ハイデガーの思索の断絶的な転換を意味するのではなく、やはり『存在と時間』以後の彼の思索の必然的な歩みの帰結として捉えるべきなのである。

終章では、ハイデガーの思索を「真性」と「われわれ」に焦点を当てて追跡してきた成果を踏まえて、本研究のさらなる展望を「技術哲学」と「間文化哲学」への展開として提示する。「技術哲学」に関しては、1953年の『技術への問い』の議論をこれまでの成果から読み解きつつ、「真性」と「有限性」の問題へと接続する。そのうえで、ハイデガーの技術論批判から出発したポスト現象学の現代技術にたいして、ハイデガーの技術論がもちうる意義を提示する。「間文化哲学」に関しては、『哲学への寄与論稿』における「存在史的思索」に基づく別の始原への移行の試みは、西洋中心主義的なのではないかという疑問から出発する。本研究は、別の始原への移行は「間文化的」になされるべきであると主張したうえで、その可能性をハイデガー自身の思索に見出す。とりわけハイデガーの「沈黙」としての「対話」に着目し、ここから「対話」における「有限性」のあり方を取り出し、現代の「間文化哲学」の試みにハイデガー哲学が寄与する可能性を示す。